

# 宮崎神宮「日誌」に見る昭和二十年

渡邊 一弘

## 一 はじめに

平成二十七年（二〇一五）は戦後七〇年にあたり、戦争について振り返る大きな機会となっている。とくに七〇年前の昭和二十年という年が、戦中と戦後の、両方の暮らしを含んでいるという点で他に類をみない激動の年であり、そのような意味からもさまざまな視点で昭和二十年という年をとりあげる試みが行われている。本稿では、宮崎神宮の神社日誌をとおして昭和二十年の宮崎市の様子をみていくこととする。

宮崎神宮の神社日誌については、筆者が千人針の研究をする際、その存在を知り、宮崎神宮の許可を得て調査を行った<sup>1</sup>。今回、宮崎神宮の了承を得て、その際に撮影した資料を利用することで、神社における昭和二十年という年を振り返ってみたい。なお、本稿の表記については、旧漢字は新漢字に、また旧仮名遣いはそのまま表記した。

まず宮崎神宮について紹介する。宮崎神宮は、神日本磐余彦天皇（神武天皇）を祭神とし、相殿に鸕鷀草葺不合尊、玉依姫命を祀る。旧官幣大社で、古くは「神武天皇宮（社）」、「神武天皇御廟」などと称され、明治六年（一八七三）に「宮崎神社」、同十一年（一八七八）に「宮崎宮」、

大正二年（一九一三）に「宮崎神宮」と改称され現在に至る。宮崎神宮は、戦時中、官幣大社でもあり、宮崎県民の崇敬を集めていた。ここでまず日中戦争直後の宮崎神宮の様子を昭和十二年（一九三七）九月二十三日付（夕）『宮崎新聞』の記事からみていく。「武運長久祈願 祖国日向神社詣で」「歴史に輝やける 神武の森・宮崎神宮 玉砂利につづく……麗しき非常時風景」とのタイトルに続き、宮崎神宮の様子が紹介される。

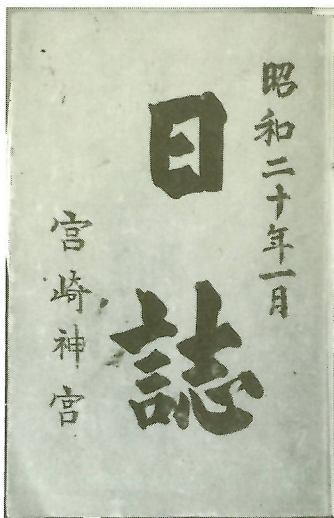
官幣大社宮崎神宮といへば八十五万県民中三歳の幼子もこれを知つてゐるに違ひない。それほど宮崎神宮は県民にとつてゆかりの深い神宮である。今時北支の風雲急を告げ一触即発の重苦しい風雲低迷し皇軍が敢然正義の楯を執るや、国家の安泰と皇国の武運長久を祈願する人の群れをなした。ことに我が郷土部隊が威風堂々として北支の野に向ふ報伝はるや一般家庭は勿論、国防婦人会、愛国婦人会その他一般団体等が一日数千と押かけて折からのしのづくやうな風雨をも厭はず一心に将兵の武運長久を祈願し、いまなほ終日祈願者が絶へない有様である。殊に玉砂利の参拝道の両側に立つて参拝者の婦人に千人針の一を依頼する姿は実に美しいものではつきりと

祖国日向の神苑にふさはしい非常時の風景を描き出してゐた。

この日の神社日誌には、三、五二八名の参拝者があつたことが記されている。宮崎県下にも、都城市の神社宮や延岡市の竹谷神社など、戦勝祈願で有名な神社は多くあつたが、なかでも宮崎神宮が大勢の参拝者で賑わつていた様子が記されている。

ここからは具体的に「日誌」をみていくこととする。宮崎神宮の日誌には、「日誌」と「社頭日誌」があり、明治期から現在までの業務が記録されている。「社頭日誌」は一部しか記録されておらず、昭和二十年分については残されていないため、本稿では「日誌」のみを紹介する。

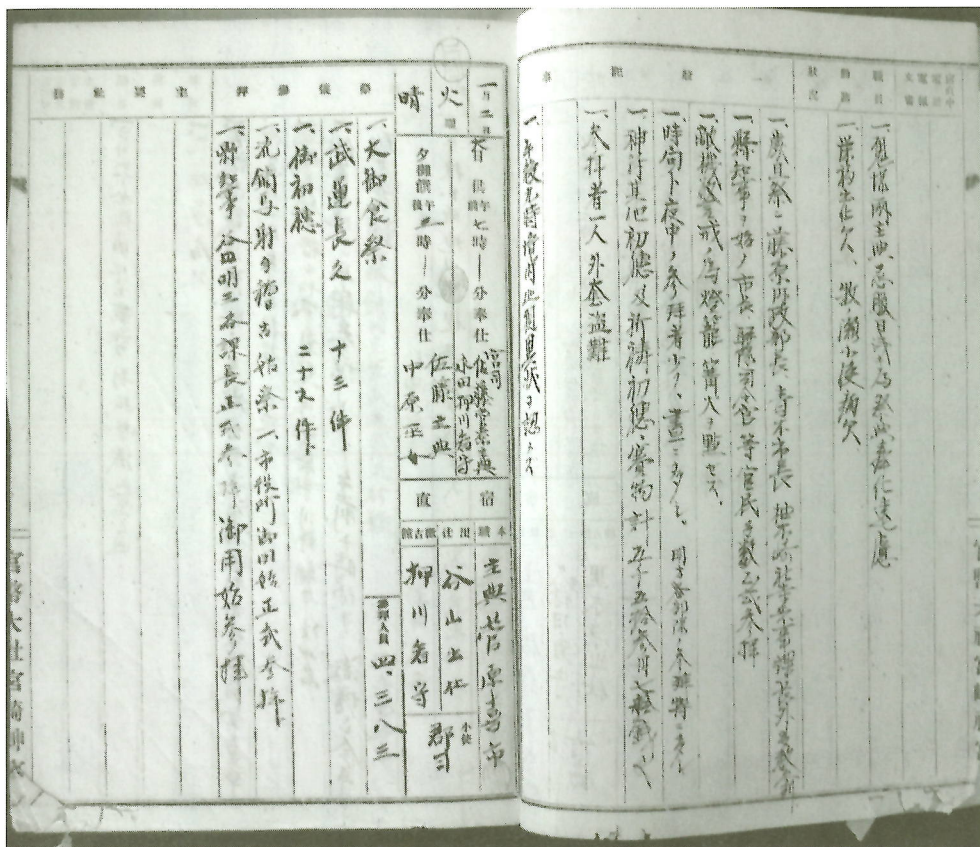
「日誌」の表頁には、「月日」「曜日」「天気」に続き、「日供」と「夕御饌」にそれぞれの時間と奉仕者名、宿直の担当者名が記されている。奉仕者は、禰宜や主典などの職員と出仕や巫女などの臨時職員の組になっており、宿直には「本職」「出仕」「徴古館」の項目に個人名が記されている。さらに「祭儀参拝」には毎日の祈願内容とその件数・人数が明記されている。主要社務には、来客などの日常業務から災害・空襲被害に



『日誌』表紙

ついて記載されている。

「日誌」の裏頁には、「宿直中電話電報文書」「職員勤務状況」「一般記事」の項目が設けられているが、表頁との使い分けがはつきりしておらず、空襲被害の様子は表裏に表



『日誌』(1月2日)

記が混在している。

「日誌」に記されている情報は、ラジオを元に記されていたことが、電線切断サレラジオ情報並ニサイレン吹鳴ナリ情況判断ニ苦シム(八月

十二日)、「昨日ノ警報解除不明、本日モ停電ラヂオ情報入ラズ、サイレン吹鳴ナリ情況不明」(八月十三日)といった記録から判断できる。

## 二 暮らしの様子について

### 【配給】

宮崎神宮においても物資の入手は困難だったようで、「神饌用スルメ配給ナリタル由、市役所学務課中原氏ヨリ通知アリ」(二月二十日)、「堀川印刷所ニみくじ印刷交渉ノ結果引受ク」(二月二十三日)、「神饌用干鰯配給量拾貫入手」(二月二十三日)、「神社用紙特配給券到着」(三月二十日)、「渡部禰宜神酒配給ノ件、防空ノ件ニツキ県庁出向」(四月十四日)、「神酒配給交渉ノ為佐藤主典配給会社へ出向」(七月二十日)など、配給や特配の文字が散見される。この状況は戦後も続き、配給の手続きを行っている。

### 〈十月二十二日〉

- 一、午前十一時菅原主典地下足袋特配之件商工課、鮮魚之件水産課、調味料(味噌醤油)特配ノ件申請ノ為出向、午後一時卅分帰宮
- 一、神饌調達ノ為宮崎農林専門学校へ久保田看守出向調達ス
- 一、押川看守神饌調達(川魚・野鳥・水鳥)瓜生野へ出向予約済

神饌についても、宮崎農林専門学校(昭和二十四年に宮崎大学に包括される)から入手するなど、さまざまな工夫をしていたことが分かる。

### 【出征】

出征に関しては徴兵検査と召集令状に関する記事が見られる。

まず永田という人物の徴兵検査についての記述が見られる。「永田出仕徴兵予備検査ノ為今夕帰宅」(二月二日)、「永田出仕賜暇帰省中ノ処、夕刻帰宮」(二月四日)とあるように、徴兵検査のためには帰省する必要があった。そして「徴兵検査ノ為帰省中ノ永田主任帰宮甲種合格」(二月十四日)甲種合格が判明している。

また、宮崎神宮の職員にも召集令状が届いたようで、「鬼塚武彦主典臨時召集令状受領、三月三日西部十八部隊入隊ノタメ会計事務引継準備」(二月二十六日)と出征のために数日にわたって引継業務を行っており、「鬼塚主典壮行式挙行ニ付午後五時ヨリ貴賓室ニ宮司以下全職員会同」(二月二十七日)と神社において壮行式が行われた。「鬼塚主典召集解除報告ノ為県庁出向」(四月七日)とあり、一時的に召集が解除となり、「鬼塚主典志布志ヨリ休暇帰省ニ付来宮、宮司・禰宜以下面接元気益々旺盛」(六月十九日)と帰省したことも記されている。終戦後、八月二十六日には「鬼塚武彦主典応召中ノ処、解除トナリ挨拶ニ来宮、本日ヨリ官舎宿泊」と、召集解除され、復員し、すぐに勤務に復帰している。

### 【防空の備え】

三月十日の東京大空襲以来、大々的な空襲が喫緊の問題となったと考えられ、「神社御警衛並社務所境内防衛ノ件ニ付会議執行」(三月二十日)とさまざまな対応が実施されることとなる。まずは防空壕の準備である。「大前齋庭ニ防空壕掘り(中略)奉仕作業実施」(四月二十四日)、「大前齋庭内防空壕掘」(午前中ヲ以テ藤棚修理完了午後防空壕設営着手)(四

月二十五日」とあるように敷地内に防空壕が作られた。また、「彌宜以下職員参道偽装ノ為木倒シ」（五月九日）とあるように社殿が狙われないよう偽装などの工夫をした。

さらに宝物については、「尚古館出品土器埋納施行」（五月七日）地中に埋められるものは埋められ、一部の宝物は疎開が行われた。「午後三時米良へ宝物疎開ノ為自動車依頼荷物準備セシモ遂ニ自動車来ラズ」（七月四日）と空襲の影響で交通にも影響が出たが、七月六日に御料品の疎開は実施された。

〈七月六日〉

一、第二回御料品疎開本日実施、午前五時貨物自動車来宮直チニ積込、菅原主典、赤木常夫付添ヒ出発、黒木守衛妻ニテ積替ノ為待機シ、午後十時積替ヲ了シ妻出発、赤木常夫都合ニ依リ予定ヲ変更シ米良迄随行

現西都市の妻町で積み替えが行われ、米良（現西米良村あるいは西都市）に御料品が届けられた。この他、神具や御神体も移動されたとみえ、「書類及潔斎用神具ノ一部ヲ徴古館地下庫へ疎開施行」（八月六日）や「特別壕仮座ヨリ本殿遷座」（八月二十六日）の記述が見られる。

### 三 空襲の様子について

ここからは昭和二十年一月から八月までの「日誌」のなかで最も多くの記録をさいている空襲についてみていくこととする。宮崎の空襲につ

いての研究はほとんど進んでいなかったが、元放送局員の三上謙一郎が文献や日記など少ない資料を整理し、さらに補足するために聞き取りを行い、空襲の実態を数冊の本にまとめている<sup>②</sup>。ここでは平成九年に再刊された『死者を追って 記録・宮崎の空襲』を補足資料として空襲についての記録をみていく。

昭和二十年は、「敵機警戒ノ為灯笼篝火ヲ点ゼズ」（一月一日）とあるように警戒のもと、年を越すこととなった。この年の最初の警戒は、一月六日であった。「午前八時五十五分警戒警報発令、続イテ空襲警報発令、十時迄宮崎ニ侵入ノ状報ナリシガ敵機ヲ見ズ、十一時三十分警戒警報解除」と、敵機は近づくことなく、警戒は解除された。

度々の警戒が続きながらも、また「柚木崎課長ヨリ時局緊迫ニ付御警衛ニ特ニ留意スベク注意、尚明朝嚴重警戒ヲ要スル旨内報アリ」（二月十八日）などの情報が伝えられつつも、直接の攻撃はなかった。

宮崎県は、日向灘に面した沿岸が南北に約百五十キロ続く地形のため、沖繩から来た連合軍の艦載機は宮崎の上空を通過して九州に入ってきた。その目標となったのが宮崎県の南端に位置する都井岬であり、地理的な条件から連合軍の上陸候補地としても最適と予想されていた。

宮崎の初空襲は、三月十八日であった。三月十六日は「午前二時情報注意報発令、全三十五分解除」と平穏であったが、「三月十七日の未明」敵機動部隊襲来ニ付、本十八日朝御饌奉供出来ス専ラ御警衛ニ奉仕ス」と記され、「十八日午前二時情報注意報発令」とある。「情報注意報」とは警戒警報の前段階で出された注意報と考えられ、「日誌」に散見されるが、一般的な防空法には記載のない表現である。宮崎市への初空襲の三月十八日は、宮崎神宮でも混乱している様子が記録されている。

〔三月十八日〕

空襲ノタメ御社頭開所セズ

敵米機動部隊九州南西海面ニ出現セルタメ、午前二時十分情報注意報発令サレ、職員一同集合待機、同六時四十分西部軍司令官ヨリ宮崎・鹿児島地区ニ対シ空襲警報発令ト同時ニ来襲、終日ニ及ビ午後六時警報全部解除サル、何等被害ナシ。

一、空襲ノタメ全職員各部署ニ於テ終日待機ス

一、本日ノ西部軍地区来襲延数実ニ千四百機ニ及ビ、宮崎市ニモ六

回反復空襲セルモ、市内若干ノ被害アルモ、神宮境内ハ全ク異

常ナシ(中略)

一、職員勤務

空襲時神宮非常ノ場合病気欠勤中ノモノ賜暇中ノモノ以外出勤

ナキ者ハ今後欠勤ノ扱ヒヲナス

一、全職員及警防団員ニ対食事及小櫛<sup>(ツバ)</sup>相ヲ二個宛給ス、給与セシ食事ハ非常用保管米一人ニ対シ一合五勺平均ノ握飯ト漬物梅干一

個宛分配ス

初空襲の混乱は翌日三月十九日も続くこととなる。

〔三月十九日〕

一、日供夕御饌共ニ警戒警報発令中ニ付神饌ノミ献供セリ

一、終日殆ド参拝者ナク從ツテ祈願奉賽申込全々無し

一、前夜来発令中ノ警戒警報曉ニ至ルモ解カレズ、宮司以下嚴戒裡

ニ朝ヲ迎フ、前日晴天ニシテ警戒ニ便ナレド、本日朝来曇天ニ

シテ、依然敵機動部隊土佐冲南方海面ニ在リト云フ情報ニ対応スべく、対空警戒ニ不便ナリ、午前十時三十五分警戒警報解除、但シ警戒ヲ要スト注意アリ、午前中無事

一、午後三時十五分再警戒警報発令直チニ空襲警報発令、敵機東方洋上ヨリ約二十機内外侵入市内東北方ヨリ急降下銃撃ヲナセド前日ニ比シ対空砲火少ナク残念ナリ、午後四時二十分頃敵三十四機編隊高々度ヲ東方ヨリ西北方ヘ向フ、悠悠通過セルモ見方ノ対空砲火全々無ク此ノ矯敵ヲ目撃シ只々痛憤堪ヘ難シ、午後五時五分空襲警報解除、但シ軍情報終了直後ケタタマシキ対空砲声起リ敵機数機雲間ヨリ急降下赤江方面ヲ攻撃シタルモノノ如ク敵ノ奇襲ニ益々憤激ヲ覚エ敵機撃退後午後六時十分一旦警戒警報解除情况要警戒ニ付宮司以下本職雇員徹宵警戒ニ決シ待機ス

(傍線稿者)

一、二十日午前五時十分情報注意報発令仮眠中看モ是認起床待機、敵機ハ四国中国北九州侵入ニ付嚴戒ヲ要シ夜明ヲ待テリ、午前六時十分警戒警報発令福岡大分ノ一部ニ侵入セル敵機南下ノ情報ニテ待機セルモ何レモ海上ニ脱去シ午前十時五十六分警戒警報解除サル

「赤江方面」とは、宮崎市大字赤江のことで赤江航空基地があり、第二航空機隊の七六二航空隊の作戦基地で、特攻作戦を展開していた。南九州にはこのほか、富高・新田原・都城・国分・鹿屋・知覧・出水などに陸海軍の航空基地があり、いずれも激しい空襲に晒された。<sup>③</sup>

三月二十日は、「情報注意報発令ト同時ニ前夜来待機中ノ宮司禰宜以下職員部所ニ就キ防衛ニ勤努」<sup>(マ)</sup>、「神宮町警防団防衛ノ為待機警戒警報解除ト同時解散」、三月二十一日には、「情報注意報解カレタレバ宿直ヲ一先ヅ平常ニ復シ夜ハ宮司以下帰宅待機ス」と平穩を取り戻した。しかし、その日の記述には「大本営正午発表 硫黄島ノ全將兵十七日夜半二期シ最後ノ突撃ヲ敢行セリ」と太く記され、終戦まで続く連日に及ぶ空襲の序章であつた。

三月二十七日には、「県公会堂ニ於ケル慰霊祭、午前十時四十分執行ノ処、警戒警報引続空襲警報発令ニ付直チニ中止、宮司以下祭員直ニ帰宮、部署ニ着キ、午後二時禰宜佐藤主典田村伶人ニテ奉仕執行ス」とあるように空襲を恐れ慰霊祭が中止となつている。このように神社は行事が多いため、予定してゐた祭事や行事が度々中止となつてゐる。

三月二十七日あたりから九州への攻撃が激化することとなり、「B 29 主ニ北九州及西南各地ニ来襲セル情報アリ」「大刀洗大村大分各地飛行場並ニ航空機工場攻撃ノ目的」「本県延岡市及付近ニ侵入ノ情報アリ、当市上空ニモ正午前十二機侵入模様ナルモ投弾スルコトナク退去セルモノノ如シ」(三月二十七日)、「青島洋上ニ西進ノ一目標アリ」「大型十機編隊鹿児島湾上ヲ旋回中、後続ク敵機ハ東方洋上ニ退去セルモ尚南方洋上ニ四目標アリノ報ニ尚一待機セルモ午後六時十五分警戒警報解除」(三月二十八日)、「大型二十機長崎ニ侵入、十時四十五分太刀洗ニ投弾中、薩摩半島上空大編隊東並進中、十一時大分方面ニ八十機ノ侵入、其ノ先鋒ハ延岡ニアリノ報ニ緊張ス」(三月三十一日)、「八代付近ニ大型一機侵入、一機豊後水道ニ侵入」(四月十九日)等との記載があり、宮崎への侵入が近づいてゐた。四月二十二日、ここでも赤江方面に攻撃が及んだ。

〈四月二十二日〉

一、午前六時二十四分警戒警報発令、全五十分空襲警報発令、宮司以下即刻登庁部署ニ著ク、昨日ニ続キ敵大型機約百八十機ヲ以テ九州全域ニ来襲其ノ主力ハ南九州ヲ襲ヒ宮崎上空ニ一機編隊二回一機二回波状攻撃ヲ行ヒ約三回投弾赤江方面ニ火災発生セルモ大事ニ至ラズ、午前九時五十五分警戒警報解除

これらの攻撃をきっかけとして、宮崎市内の家々には窓ガラスに紙が貼られ、天井板が外されたという。被害を少なくするための通達であつた<sup>(4)</sup>。

続く敵の攻撃は、赤江基地周辺から市街地に移り、時限爆弾が使われた。

〈四月二十六日〉

一、午前五時三十分警戒警報発令、全四十九分空襲警報発令、宮司以下直ニ登庁部署ニ著ク、敵機豊後水道及鹿児島湾方面ヨリ侵入、九州全地区就中北九州南九州ニ至ニ来襲、雨天ノ為雲上ヨリ盲爆、市内ニモ数次波状的ニ来襲、各所ニ投弾相当被害アリシ模様ナルモ神宮ニ於テハ全々被害ナク御安泰ナリ、本日ノ敵機大型百二十機各所ニ時限爆弾ノ投下夕刻マデ爆発ス、午前十一時四十分空襲警戒警報解除

投下された時限爆弾が翌日時間差をおいて爆発し、この日で一五名が爆死したという<sup>(5)</sup>。

〈四月二十七日〉

- 一、午前七時七分警報発令、九時半神宮上空大型二十一機来襲ス、御被害ナシ、十時十五分警報解除、昨日敵機投弾セル時限爆弾大淀方面、花ヶ島競馬場方面ニ終日爆発ス

続いて大きな空襲として、『日本の空襲』に記載されているのが五月十一日の空襲であるが、「日誌」には、五月十三日の空襲の被害の方が大きく記載されている。五月九日には「四月二十六日以来連日ノ警報発令空襲アリシガ本日ハ終日注意報モナク静ニシテ何カ忘レモノシタル感ナリ、嵐ノ前ノ静サカ」と記されていた宮崎市内ではあつたが、五月十一日に空襲が始まる。

〈五月十一日〉

- 一、午前五時十五分情報発令、同六時半警戒警報発令、同九時四十分マデ前後解除、同時間中何等投弾スルコトナシ
- 一、午後二時五十分警戒警報発令、同三時スギ空襲警報発令ト同時 神宮東町ヲ始市内数箇所ニ投弾、高農家畜病院西門付近ニ数弾（時限弾）ヲ以テ爆撃スルモ幸ニ境内ニハ被弾ナシ
- 一、午後十時三十分警戒警報発令本職全員集合、同十時三十分解除

「神宮東町ヲ始市内数箇所ニ投弾、高農家畜病院西門付近ニ数弾（時限弾）ヲ以テ爆撃」と簡潔に記されているが、この日は「宮崎市・駅付近、師範学校附近、宮田町、旭通り、県病院付近と都城市・川崎航空機工場」が爆撃され、少なくとも七名が爆死したという<sup>6)</sup>。

〈五月十二日〉

- 一、午前八時五十分警戒警報発令、全九時十五分空襲警報発令、敵小型機十数機二回ニ亘リ来襲、市内南部方面ニ銃爆撃セルモ被害ナシ、十時三十五分空襲警報解除、全十時四十分警戒警報解除
- 一、午後八時空襲警報発令、終夜間断ナク小型機少数来襲数回照明弾投下銃爆撃ナルモ宮城ニ何等被害ナク午前五時トナリ空襲警戒警報解除

〈五月十三日〉

- 一、昨夜八時ヨリ本朝五時迄一機或ハ二機ニテ照明弾ヲ落シ、小型爆弾或ハ機銃掃射ニテ間断ナキ空襲ヲウケ宮司以下一睡モセズ職員敢闘ス、幸ヒ御被害ナシ
- 一、午前六時二十分、再ビ警報朝飯ノ暇モナク空襲、小型編隊、午後六時ニ至ル迄間断ナキ来襲赤江ヲ中心トシテ付近ノ亡爆ヲ受ク
- 一、二回不眠不休ノ敢闘ニ幸被害ナク午後六時一旦警報解除セラル、職員一同夜ニ備ヘテ全員詰ル事トシ夕飯ヲスマセタルニ三度警報発令、同時ニ空襲、小型機ノ来襲続ク、二十三時四十分マリ

アナノB二十九ノ大編隊二十四時迄宮崎東南ニ当着ノ見込、焼夷弾攻撃ノ恐アリ、嚴重ナル警戒ヲ要スノ報ニ一同緊張待機ス、シカシ大編隊東部ヨリ熊本方面ニ向ヒ張りツメシ氣一度ニ緩ミ一同交代ニテ壕ノ中、軒下、木下ニテ一時程休ム、四時近クヨリ又来襲ヲウケ味方軽戦車之ニ応戦、激戦ヲ開ス、尚来襲続ク祖国日向モ又決戦段階ニ突入ス

「日誌」によると、五月十二日の午後八時から十三日の午前五時まで間断のない空襲があった。午前六時二〇分から午後六時まで再び間断なき空襲があり、いったん警報が解除されるも、すぐに三度目の空襲が続いた。二三時四〇分に四度目の攻撃が予想されたが、大編隊は熊本方面に向かったので職員一同は安心して休息を取った。

五月十五日から二十三日にかけては宮崎市の上空は平穏であったが、二十四日、赤江方面が攻撃された。

#### 〈五月二十四日〉

- 一、午後三時警戒警報発令、全三時三十分空襲警報発令敵小型十数機二回二巨り来襲、主ニ赤江方面ヲ機銃攻撃シ、一部火災ヲ生ジタル模様ナルモ敵機三機墜セルモノノ如シ、全午後五時五分空襲警報解除

この後、大都市は大規模な空襲に見舞われるが、五月いっぱいまで宮崎市は平穏であった。

六月も連日空襲警報は発令されたが、被害は出ていない。この間、沖繩における戦闘が終結したことを大本営発表で知り、「沖繩戦況地上戦闘終結セリトノ特別報導<sup>⑦</sup>アリ、痛憤ニ不堪全地守備軍官民一体ノ血闘ニ対シ万謝万感之黙禱ヲ捧グ」(六月二十五日)と記している。

七月の中旬から宮崎市は空襲に晒されることとなる。

#### 〈七月十一日〉

- 一、午前七時三十五分警戒警報発令間モナク空襲、鹿児島方面ヨリ侵入

セル小型機八十余機来襲、赤江ヲ始メ市内ニ銃爆撃、西神苑脇ノ民家三軒ニ直撃弾ヲ蒙ル、本殿周囲ニモ爆弾破片十五六ヶ落下、社務所、旧社務所、徴古館、官舎ノガラス一部爆風ノ為破壊、電話線切断ス、シカシ御安泰ナリ、職員一同無事、午後一時再度空襲投弾ナシ

この日の空襲では三人の犠牲者が出たという<sup>⑧</sup>。七月十五日まで空襲は無かったが、七月十六日、大淀川北側の末広町から旭通り、吾妻町、大淀にまで被害は及び八名が亡くなっている<sup>⑧</sup>。米軍機による宮崎市への空襲は七月十七日から二十六日まではなかった。

#### 〈七月二十七日〉

- 一、午前十一時三十五分警戒警報発令、十三時三十四分空襲発令、十六時二十八分空襲解除、十六時三十分警戒警報解除、市中機銃掃射特ニ橋橋被害セルモノノ如シ
- 一、二十時二十三分警戒警報発令、二十三時同解除、二十四時三十分再ビ警戒警報発令、引続空襲発令、一時二十分空襲解除、一時三十分警戒解除

この日の空襲では、六名が亡くなり、宮崎市の橋橋が破壊された。

#### 〈七月三十一日〉

- 一、午前七時四十分空襲警報<sup>⑨</sup>発、小型数編隊数回ニ巨り来襲セルモ投弾セルモノ一編隊約四十機ニシテ市内各所ニ被害アル模様、



午後二時二十分空襲警報解除、全二時四十分警戒警報解除、  
一、午後三時四十分警戒警報発令、全三時五十分空襲警報発令、小  
型編隊通過セルノミニテ、被弾ナシ、四時二十分解除、全三十  
分警戒解除

この日は大淀川の両岸、松山町周辺と城ヶ崎が空襲を受け、九名が爆  
死している。

そして八月九日には、ソ連対日参戦について「蘇連駐ソ佐藤大使ヲ通  
ジ本日ヨリ交戦状態ニ入レル旨通告直チニソ満国境満州国要地朝鮮各地  
ヲ空襲セル、特別重大報導ナリ(大本営発表)」と記載がある。この日は「終  
日警報発令間断ナク敵機飛来セルヲ以テ宮司以下部署ニ著キ待機セリ」  
という状態であつた。しかし、この後にそれまで主要都市のなかでも被  
害の少なかつた宮崎市は、八月十日から十二日の連続爆撃を受けること  
となる。この三日間にわたる空襲の被害は、全焼した家屋は一、九九〇戸、  
半焼二二戸、死者三六名、重軽傷者一七名であつたといふ。<sup>10)</sup>

〈八月十日〉

一、午前七時四十分警戒警報発令、同九時十五分空襲警報偵察機二、三  
回侵入ノ後、同十時頃大型三編隊来襲、市中ヲ焼夷弾攻撃セリ  
為ニ宮崎駅ノ駅前通り、河原町ニ大火災生ズ、午後二時過空襲  
警報解除、火災夕刻迄ニ鎮火約九百戸焼失、然シ死傷者殆ト無  
シト云フ、近ク高等農林学校ニモ投弾アリシモ不発ノ為火災発  
生セズ、御社殿境内被害ナク御安泰ナリ、一時停電、電話モ不  
通ノ為、警報ノ解除不明

このときの攻撃は焼夷弾によるもので、川原町・松山町・広島通・宮崎  
駅前が集中的に攻撃を受け、大淀川沿いの旅館街は焼失、宮崎駅及びそ  
の付近は焦土と化したといふ。<sup>11)</sup>

〈八月十一日〉

一、空襲熾烈ヲ極ムル昨今、御警衛ニ関シ充分ナル注意ト旺盛ナル  
敢斗精神ヲ以テ待機中、午前七時突然空襲警報発令サル、各回  
担当ノ各所ニ御警エ警備ニ就ク、沖繩基地ノ中型小型戦慄連合  
編隊ニモ、大隅半島及都井岬ヨリ北東進ニ来リ、一ツハ延岡ヨ  
リ南進シ長時間ニ亘リ上空ノ旋回市内各所ヲ機銃掃射ス(後略)

この日、焼夷弾攻撃はなく、機銃掃射などによる爆撃が中心で、橘橋北  
詰では六名が亡くなつたといふ。<sup>12)</sup>

〈八月十二日〉

一、午前七時三十二分警戒警報、全四十分空襲警報発令、八時頃ヨ  
リ大隅半島ヲ経テ北進セル大型小型編隊当市東方ヲ北進スル  
モ、次第ニ数ヲ増シ、ヤガテ北東方ニ於テ連続的ニ爆発音ヲ聞  
キ、待機中ノ処、午前九時三十分頃東方ニ一大編隊爆音北西進  
スルヤ、戦爆連合ニテ下北方方面ヨリ超低空ニテ焼爆攻撃開始、  
下北方、和知川原、神宮町、神宮東町方面一瞬ニシテ黒煙ニ包  
マレ所方ニ火災発生時ヲ移セズ、小型編隊来襲銃撃及小型ガニ  
キ爆弾投下、更ニ花ヶ島、江平方面焼爆、更ニ市中央部焼爆撃  
連襲、数十分後ニハ全市□□包マレ凄烈ヨリ其ノ間数回ニ亘リ

機銃攻撃ヲウケ、消火意ノ如クナラズ、延焼次第ニ広マリ正午過漸ク下火トナリ

一、電線切断サレラヂオ情報並ニサイレン吹鳴ナリ情況判断ニ苦シム

一、境外西神苑側東神苑神畑外側ニ火災発生、特ニ東神苑内ヨリ油脂散布ニ依ル火災ニシテ土塁ヨリ竹藪ニ延焼シタルモ菅原主典初期防火ニ依リ消火シ事ナキヲ得タリ西神苑ノ方ハ土塁ニテ延焼防ガル

一、午後二時頃大方諸方鎮火セル頃不意ニ六機編隊来襲銃撃ヲ被リ再度火災発生ヲ認ム、其ノ後敵機ノ来襲ナリ（後略）

〈八月十二日〉

一、曉方神畑再発火セルモ隣家ノ協力ニ依リ消火ス

一、昨日ノ警報解除不明、本日モ停電ラヂオ情報入ラズ、サイレン吹鳴ナリ情況不明

一、敵偵察機シキリニ来襲、夕刻迄別段攻撃ナシ

一、夜ニ至ルモ花ヶ島、専売局、橋通ノ昨日ノ火災尚鎮火セズ

一、昨日ヨリ水道断水、夜ニ入ツテ電灯ツク

〈八月十四日〉

一、六時四十一分警報発令、引続き五十分空襲発令、十五時四十五分空襲解除引続き警戒警報解除、夜中ニ吾カ上空ヲ彼我不明ノ飛行機旋回ス待避信号亦頻ナリ、然レドモ投弾ナシ

この翌日、八月十五日の玉音放送によって終戦が告げられるが、「午前七時三十五分警戒警報発令」が出され、さらに八月十七日にも「午前十時警報発令、敵中型二機侵入、東方海面脱去、十二時三十二分警報解除」とあり、終戦が告げられたとはいえ、引き続き警報は出されていたことが分かる。

#### 四 終戦

終戦の日の様子について八月十五日の「日誌」には次のように記されている。

昭和二十年八月十五日正午

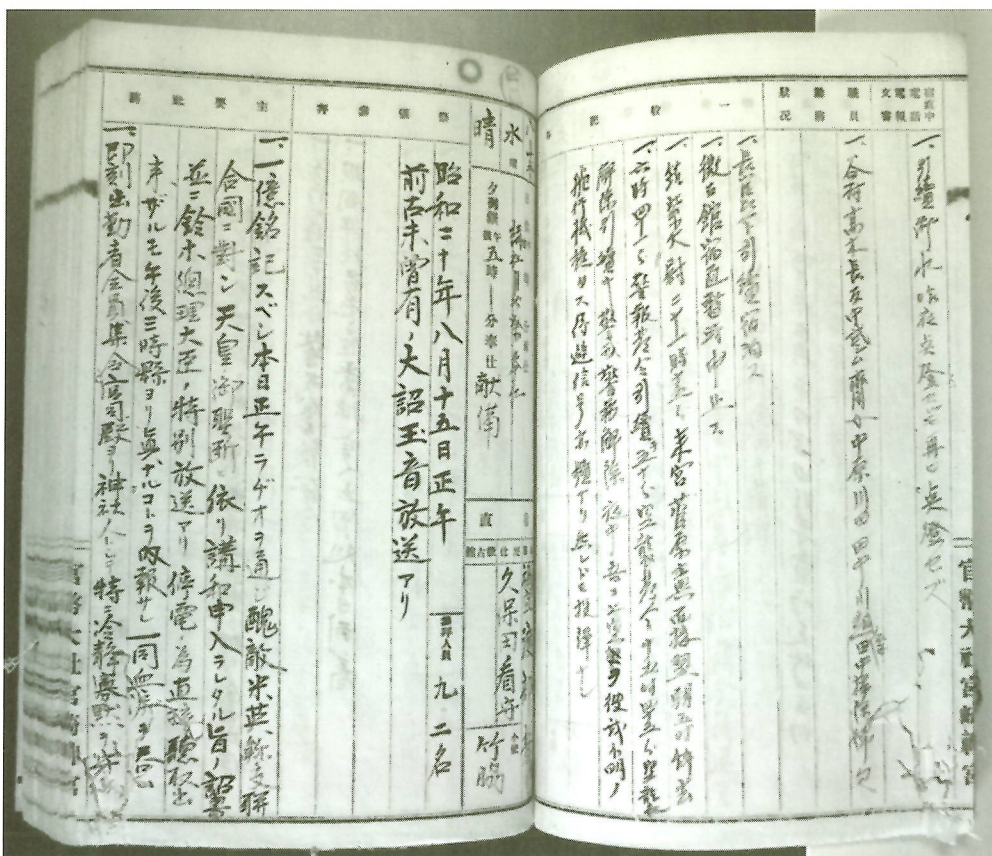
前古未曾有ノ大詔玉音放送アリ

一、一億銘記スベシ本日正午ラヂオヲ通ジ醜敵米英鮮蘇支連合国内對シ天皇御聖断ニ依リ講和申入ラレタル旨ノ詔書並ニ鈴木総理大臣ノ特別放送アリ、停電ノ為直接聴取出来ザルモ午後三時ヨリ真ナルコトヲ内報サレ一同血涙ヲ吞ム

一、即刻出勤者全員集合、宮司殿ヨリ神社人トシテ特ニ冷静寡黙ヲ守リ局面ノ推移ヲ凝視シ輕挙妄動ヲ慎シムベキコトヲ訓示サル

八月十七日には「陸海軍人ニ對シ銃ヲ納メヨノ勅語賜ハル、午後五時報道悲憤慷慨限リナシ」と武装解除するように指示があった。

終戦直後の混乱の例としてよく話に聞く米軍が女性たちをおそうと恐れていたデマについての記述がある。八月十八日には「市ヨリノ非公式



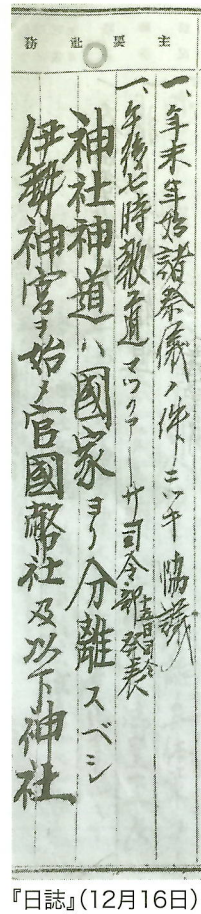
『日誌』(8月15日)

通達ニテ婦女子一時待避スベキ旨外部ヨリ伝ハリ佐藤主典真相調査ノ為地区司令部及市役所ニ出向セルモ真疑不明取敢ヘズ女子職員ヲ帰宅セシム」との記述があり、「流言日々加ハル傾向アリ民心ノ動揺ヲ如何セン、

速カニ施政層ノ冷静適切ナル指導ヲ要ス、今夕ノ動揺、特ニ甚シク、只拱手望観他ナシ、多難ナルベキ前途ヲ思ヘバ慨心轉切ナリ」と、冷静な対応を求めている。八月十九日には「婦女子一時退避セル為扁女巫女ノ出勤ナシ」と婦女子は自宅待機となったが、「昨日ノ婦女子一時退避ハ流言ナル事明カトナリ、市中ハ一部帰ル婦女子モアリ、尚退避スル者モアリ」と市中においては混乱が続いていたと思われる。

空襲の被害を終戦によつて免れた宮崎県民であつたが、その後には追い打ちをかけたのが台風であつた。八月二十六日には、「夜半ヨリ大暴風雨トナリ、授与所前大杉倒レ、参拜者休憩所第二授与所下敷倒壊、第二倉庫ノ裏大杉檜五、六本倒レ、水道タンク、物置、流鏑馬道場倒壊ヲ始メ、境内大立木ノ倒木数ヲ知ラズ、東西参道全ク通行ナラズ」との大きな被害であつた。八月二十七日には、「前夜半ヨリノ暴風雨、午前七時漸ク止ミ、宮司禰宜被害状況取敢ヘズ巡視ス」とあるように午前中には収まり、九月三日からは「風害復旧工事」が始められたが、九月五日でも「去ル八月二十七日台風以来電灯ナク新聞来ラズ」という状況であつた。さらに十月八日には「本日午後台風警報発令セラレシヲ以テ警戒ヲ厳ニセシモ、幸ニ暴風ノ来襲ナク無事ヲ得タリ、但シ午後七時頃、電線ノ故障ニテカ社ム所停電ス」の被害状況であつた。さらに十月十日「昨日ヨリノ台風模様本日ハ相当ノ強風トナリ御殿ヲ始メ社務所各所ノ戸纏ヲ一層嚴重警戒ス午後五時頃迄ニ略西南ノ風ニ変リ好□ス被害ハ皆無」と台風がそれて安心した様子が分かる。

宮崎神宮にとつて重大な局面が訪れる。十月八日に「国教トシテノ神道ヲ廃止セシムル旨ワシントンニ於テ正式共役表セリト本日ノ朝日新聞に記載シ有リ」との報道であつた。十二月十六日には「午後七時報道マ



『日誌』(12月16日)

ツクアーサ司令部十五日司令発表「神社神道ハ國家ヨリ分離スベシ伊勢神宮ヲ始メ官國幣社及以下神社」との記載があった。いわゆる神道指令(覚書「國家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」の通称)である。翌日十二月十七日には「昨夜ラヂオ報道ニテマツカアサー司令部ヨリ祭政分離ノ具体策ヲ日本政府ニ司令セシ旨発表セラレタリ爾今ハ行政的ニハ御皇室及政府ト分離セラレタル立場ニ於テ神宮神社ハ運営奉祀セラレル事トナレルモ根底ヲ流レル神社齋祀ノ精神ニ於テハ毫末モ異ナル所ナク只管皇室ノ弥栄ヲ祈念スル耳」と神道は行政とは分離されるが、危惧されていた神道廃止はなくなつた。

## 五 祈願内容について

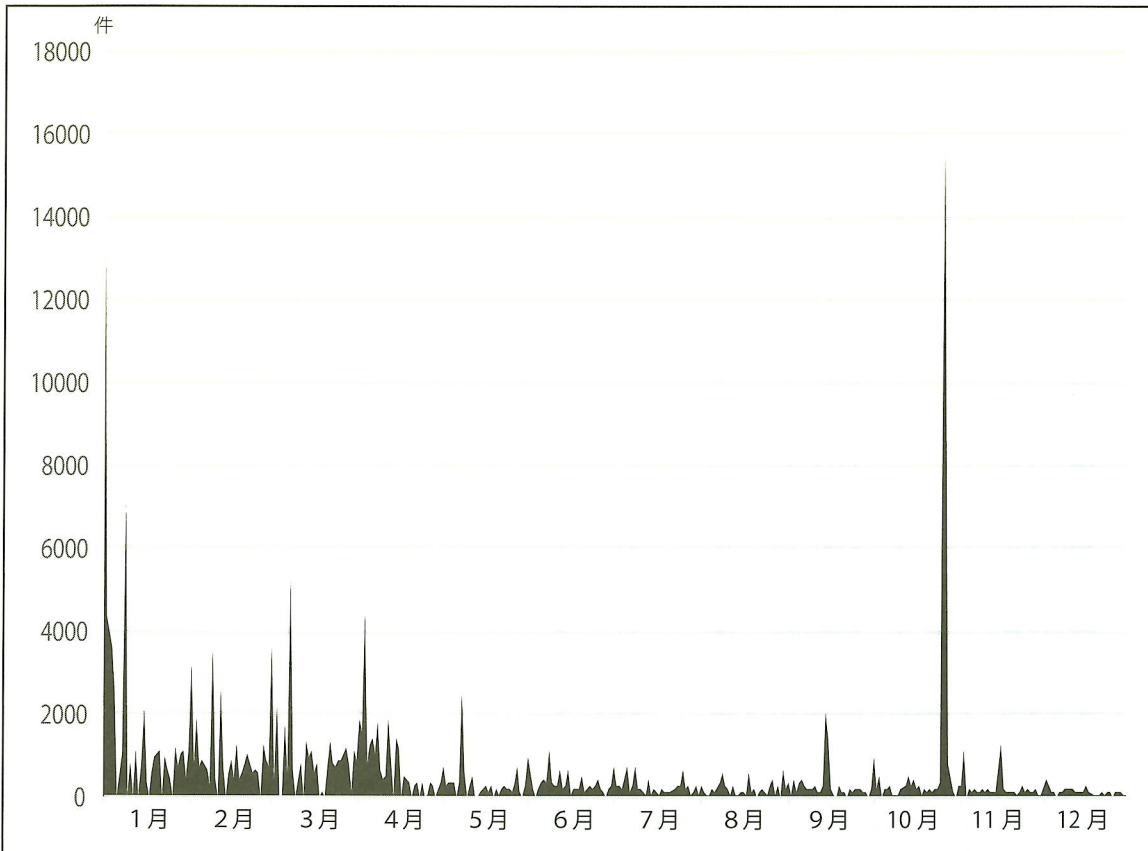
昭和二十年という年は、神社にとつても激動の年であつた。戦況の悪化を好転させるためにも武運長久や戦捷祈願が行われ、個人的な祈願として千人針祓などが行われたものと考えられるが、実態はどうなのかみていくこととする。参拝者数、武運長久、千人針祓、正式参拝、初穂料、玉串料、家内安全、婚儀、解願、初宮詣、厄祓、病氣平癒など主な祈願内容を表にしたが、紙面に限りがあるので、本稿ではグラフィーのみを提

示することとする。まずグラフは参拝者数の経緯を示している。

### 【参拝者数】

昭和二十年の始まり、正月三が日の様子を見ることとする。一月一日は「敵機警戒ノ為灯籠篝火ヲ点ゼズ」という表記に始まり、「時局ノ下夜中ノ参拝者少ク、昼ニ多シ。明方部隊ノ参拝特ニ多シ」とあり、灯火管制の影響か、初詣も暗がりの中行われたものと思われ、夜間の参拝客が少なかつたことが分かる。一月二日には、「例年ニ比シ早朝参拝少ナク午前十時頃ヨリ激増シ今年聊カ変調ナリ」と例年との違いが記されている。正月三が日の参拝人員は一日が一三、一六三人、二日四、三八三人、三日が三、五九三人であつた。一月三日には「猷餅並武運長久祈願祭執行宮崎市婦人会長外会員約四百名参列」との記述はあるが、正月一日のみが多く、むしろ六日の大詔奉戴日が六、九九一人と多くの参拝者で賑わっている。

四月中旬までは一定の参拝者が訪れているが、それ以降参拝者の数が激減する。これは明らかに空襲の影響で、外出を控えるために神社参拝から足が遠のいたと考えられよう。終戦を契機にさらに参拝者数は激減するが、これは戦時体制が終了し、神道に対する不信感が募つたためであろうか。その後、部分的に増えている日がある。九月十四日は「宮崎国民学校正式参拝」「宮崎県庁員谷口知事以下正式参拝」とあることから何らかの機会です正式参拝が行われたために増えていると思われる。続いて十月二十七日には一五、五五八人と増えているがこの日は神幸祭・内祭であり、前日から賑わっていたことが分かる。「例年ニ異リ本年ハ御神幸ノ御盛儀ハ取止メ内祭トシテ知名氏多数参列ノモト齋行ノ後、本



グラフ1 参拝件数

日ノ神賑行事トシテ市役所主催ニテ神楽、相撲、舞踊等正門前左側及東西神苑ニ於テ賑々シク奉納セラレ観覧者又夥シク」と賑わいをみせていた。これについては「ポツダム宣言ノ嵐ニモマレヲル現況下、神人和楽ノ裡ニ神幸祭内祭ヲ滞リナク終了セルハ洵御神威ニ抛レルモノニシテ、又祖国日向ノ実ヲ亡ナハズ力強キ次第ナリキ」と記され、神道離れが深刻であつたことが分かる。

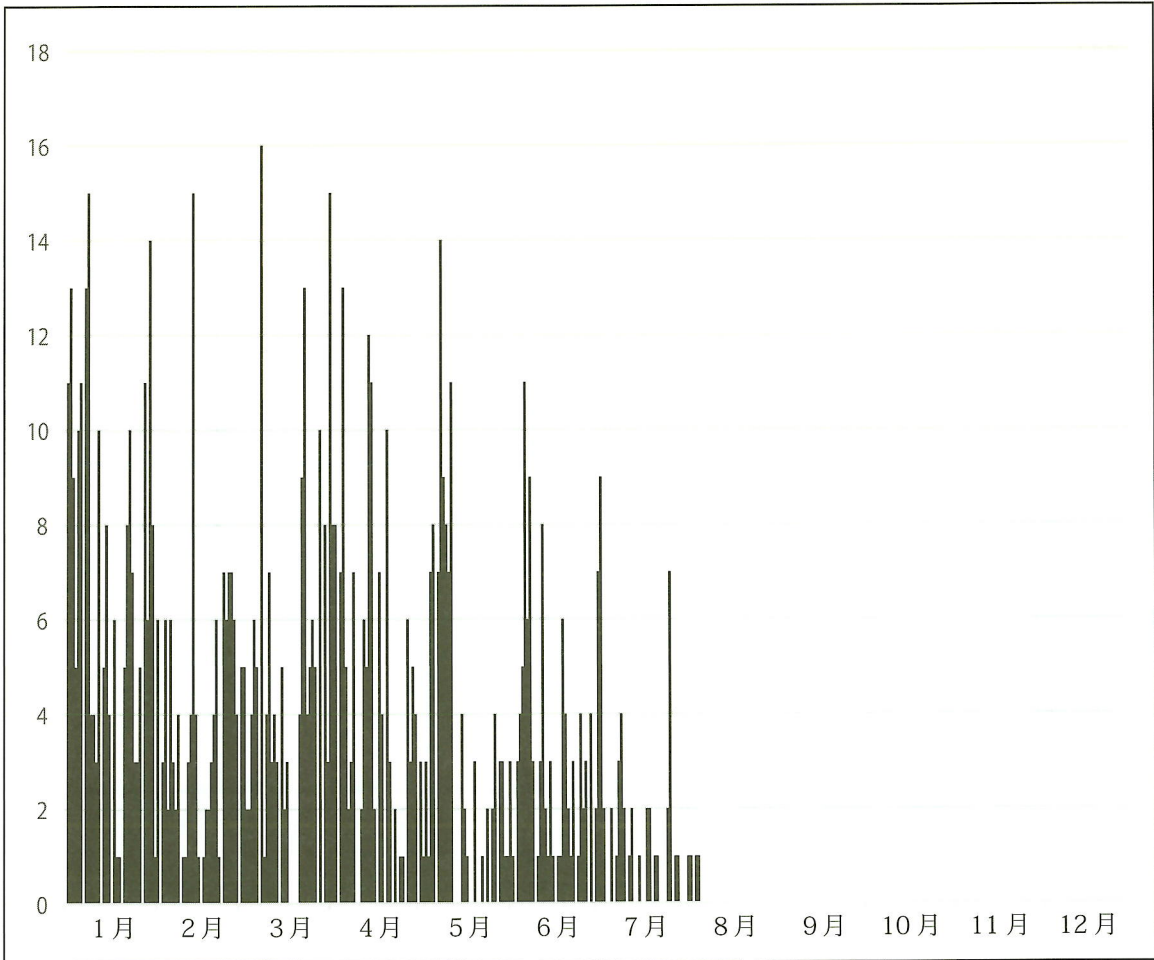
#### 【戦中の祈願】

戦時中に特有の祈願内容としては、武運長久、千人針祓などがあげられる。

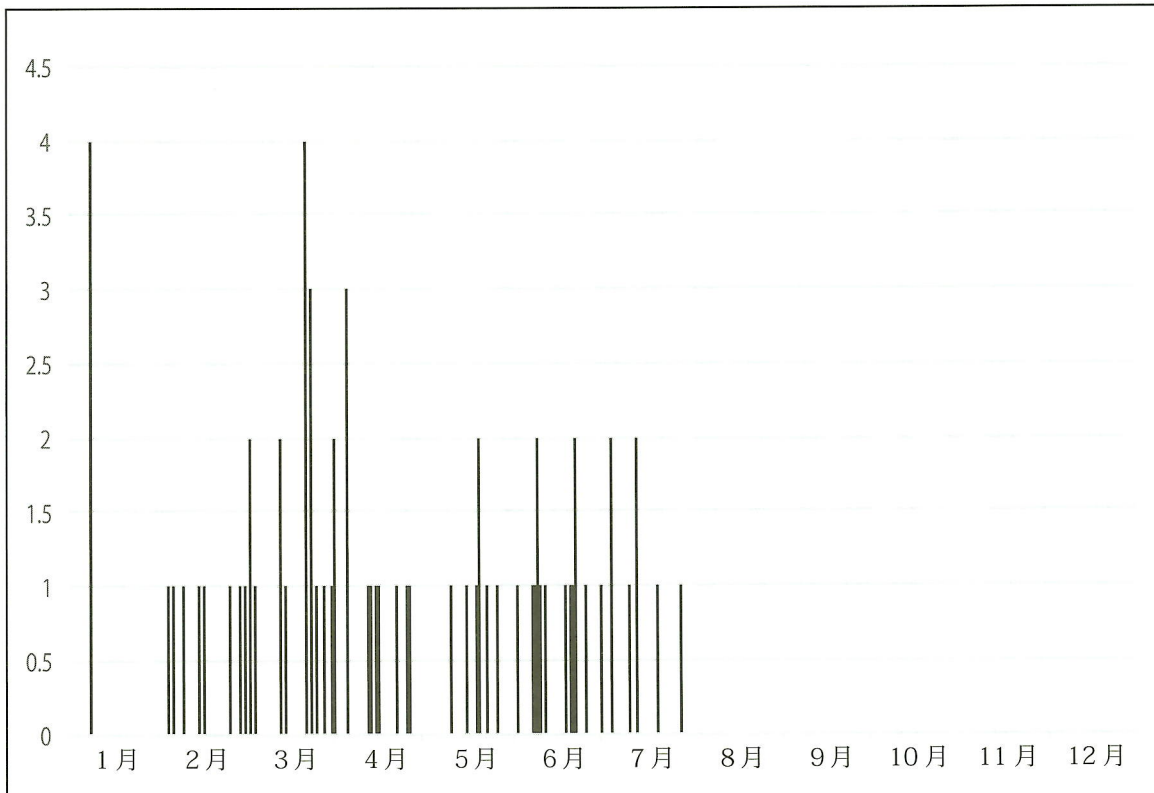
武運長久祈願(グラフ2)は祈願内容のなかでは最も多く記載があり、人数も多いが、七月になると少なくなり、八月に入ると一日一件となり、八月四日を最後に武運長久祈願は行われなくなった。終戦を前に戦争の勝ち目がないことを理解していたのかもしれない。

一方、千人針は、太平洋戦争の頃にはすでに行なわれなくなったという研究もあるが、宮崎神宮には七月二十八日まで行われていたことが分かる(グラフ3)。「日誌」には「千人針祓」と記されていた。千人針は製作したものをそのまま渡す場合と神社や寺院に持参し、祓いや祈祷を受け、御朱印を受けたものを贈る場合があつた。宮崎神宮の記録に残っている千人針は祓いを受けたものにあたる。

意外であつたのが、戦捷祈願である。昭和二十年になつて戦捷祈願として行われたのは、一月七日、一月十七日、五月十七日の三例だけであつた。類似の祈願としては「宮崎市宮崎郡内出征軍人家族案内醜敵米英撃滅必勝祈願祭斎行家族参列役六百名」(二月十五日)「寇敵撃攘祈願」(五



グラフ2 武運長久



グラフ3 千人針祓

月二十三(二十五日)などがあるが数は少ない。武運長久と戦捷祈願であれば、無事に帰ってきて欲しいという気持ちが強かったことが理解できる。

このほか、「学徒動員奉告・祈願」(一月十七日)「陸軍機献納奉告祭」(一月十八日)「宮崎師範学徒動員隊祈願」(一月十九日)「宮崎青年師範生徒四十一名農業増産挺進隊トシテ出発奉告」(三月十一日)「応召入隊祈願」(三月三十日)「宮崎市国民義勇隊結成奉告祭」(五月三十一日)「帰還奉賽」(六月十一日)などがあつた。

## 六 まとめ

宮崎神宮の「日誌」は、明治期から現在まで継続されている神社日誌として貴重な資料である。本稿ではその一部である昭和二十年の部分のみを切り取り、その時代の様子をみてきた。「暮らしの様子について」では、「配給」「出征」「防空の備え」に関する記述を紹介した。神社においても配給を受ける必要があり、物資の入手には苦勞している様子が分かる。実際に宮崎神宮から徴兵検査を受けた職員や応召され出征した職員の具体的な動きを知ることができた。防空の備えについては、かなり多くの記述が見られたが、紙面の都合でそのほとんどを割愛した。戦時下の神社の運営の苦勞が理解できる内容であり、貴重な資料であるといえる。

「空襲の様子について」では、三上謙一郎の資料を手がかりに空襲の記録を紹介した。三上が指摘するように宮崎の空襲の資料は少なく、宮崎神宮の「日誌」のような事務的な警戒警報・空襲警報の詳細な記録と聞

き取りをつきあわせることでより詳細な空襲による被害の実態が解明されるであろう。

「終戦」の項目では、終戦直後の混乱の様子が理解できる。流言への対応やGHQによる神道指令に対する不安が記録されており興味深かつた。

「祈願内容について」では、戦時中と戦後で神社の役割が大きく変わったことが実態として理解できた。戦時中の国家神道としての役割も連日の空襲にはかなわず参拝者は激減した。終戦を迎えいったん宮崎神宮への参拝者数が増えずにいたが、再び神社の役割が必要とされるようになるきっかけに、のちに「神武さん」と呼ばれる御神幸祭が重要な役割をもつていたことが分かつた。

宮崎神宮は九州の一神社ではあるが、その神社日誌を通して「昭和二十年」という年を振り返ることができた。この「日誌」は時代を記録する貴重な資料であり、今後さらに研究されることが望まれる。

最後に本稿を執筆することに許可をいただいた宮崎神宮の杉田秀清宮司、黒岩昭彦権宮司に感謝の意を表したい。

### 〈注〉

(1) この「日誌」については、明治三十年(一八九七)から昭和二十年(一九四五)の「日誌」を平成二十一年(二〇〇九)、平成二十七年(二〇一五)に調査することができた。渡邊一弘「宮崎の千人針(一)」、『みやぎき民俗』第六三号(平成二十二年、宮崎県民俗学会刊)、博士論文『戦時中の弾丸除け信仰に関する民俗学的研究―千人針習俗を中心に―』(平成二十六年、総研大甲第一六四八号)で紹介している。

(2) 三上謙一郎は、『記録・宮崎の空襲』(昭和五十四年、鉾脈社)、『里も村も空

襲された―記録・宮崎の空襲(2)』(昭和六十年、鉾脈社)、『死者を追って―増補・宮崎市空襲の記録』(平成元年、鉾脈社)の三冊を刊行しているが、それらを整理し『死者を追って 記録・宮崎の空襲』(平成九年、鉾脈社)として再刊した。

- (3) 前掲『死者を追って 記録・宮崎の空襲』三五〜三六頁
- (4) 前掲『死者を追って 記録・宮崎の空襲』四六頁
- (5) 前掲『死者を追って 記録・宮崎の空襲』四七頁
- (6) 前掲『死者を追って 記録・宮崎の空襲』六八〜六九頁
- (7) 前掲『死者を追って 記録・宮崎の空襲』一四三頁
- (8) 前掲『死者を追って 記録・宮崎の空襲』一四二頁
- (9) 前掲『死者を追って 記録・宮崎の空襲』一四九頁
- (10) 前掲『死者を追って 記録・宮崎の空襲』一五六頁
- (11) 前掲『死者を追って 記録・宮崎の空襲』一六八頁
- (12) 前掲『死者を追って 記録・宮崎の空襲』一六八頁

#### 著者プロフィール

渡邊一弘(わたなべ・かずひろ) 昭和四十一年宮崎県生まれ。

日本民俗学専攻。鹿児島大学大学院人文科学研究所修了。総合研究大学院大学日本歴史研究専攻博士後期課程修了。平成二十六年(二〇一四)『戦時中の弾丸除け信仰に関する民俗学的研究―千人針習俗を中心に―』により文学博士。宮崎県史編さん室、宮崎県総合博物館の嘱託職員などを経て、平成十三年から昭和館勤務。現在、昭和館図書情報部 図書情報課長。